

中学校初期段階における英語学習意欲の向上と育成

— 「書くこと」の帯活動授業実践を通して —

学籍番号 249312

氏 名 大畑 健太朗

主指導教員 箱崎 雄子

副指導教員 橋本 健一

1. 背景

「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説外国語編」では、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新により社会構造が急速に変化している現代の日本において、生涯にわたる様々な場面で外国語によるコミュニケーションが必要とされている、とされている。ここでいう、コミュニケーションとは、「話すこと」だけに限定されず、4技能5領域すべてが含まれているだろう。学習指導要領の目標にもこれらの技能を「一体的に育成する」とされている。しかし、2年間の実習において、中学校段階の授業では、特に「書くこと」の言語活動が不十分になっているケースが多く見受けられた。また、藤崎（2025）によると、中学校の1年生が一学期すでに英語の学習をgive upしたい、と感じるような状況を生んでいる一つの要因が、英語の読み書きができないことである、とされている。実習校の義務教育学校においても、読み書きの難しさから現れる「英語嫌い」の生徒は多くいたのも事実だ。

そのため、本研究においては「書くこと」に焦点を当てた帯活動授業実践を行い、生徒が英語学習のどのような点に苦手を抱えているかを分析し、彼らの苦手意識が「書くこと」とどのように結びついているのかを調査した。

2. 研究方法

本研究では、「書くこと」の活動を通して生徒の英語学習へのモチベーションの変化を事前アンケートと事後アンケート（質問紙調査）を用いて調査した。また、1学期には全4時間「1 minute talk」を帯活動として行い、生徒がどの程度スピーキングとリスニングに親しめているのかを見取った。2学期ではそれぞれのクラスで全4時間、主にライティングの活動を帯活動として実施した。（事前アンケートと事後アンケートは2学期の授業実践の前後で行った）最終的に生徒それぞれが「50語～100語」の英文を書くことで、彼らの英語へのモチベーションや自己有用感を向上させることを試みた。本研究で対象とする生徒は、大阪府内の義務教育学校（公立）の7年生（中学校1年生にあたる年代）の内、事前アンケートと事後アンケートの両方に回答した生徒105名とした。

3. 研究の結果と考察

本研究の結果と考察について、事前アンケートの結果と事後アンケートの結果を照らし合わせて分析する。2 学期の授業実践を通しての生徒の心情の変化としては、「英語を学ぶことが好きだ」と「英語を学ぶことは得意だ」の2点に関して、著者が思っていたような変化が見られなかった。しかし、「書くこと」の授業実践を通しての感想・できるようになったことの質問においては、本実践が効果的であったと示すものが多く書かれていた。また、「『書くこと』の活動を通して、『英語』が少しでも楽しいと感じられましたか」の質問においては、86%もの生徒が「感じられた」と回答した。これは、短期間ではあったが継続的に「書くこと」の実践を行ったことで、自分の成長を認めることができたことが起因しているのかもしれない。

考察については、生徒の英語を学ぶことに対してのモチベーションや自己有用感は短期間での実践においては大きな変化は見られないことが分かった。もし、「書くこと」の実践に関して年間を通して長期間行うことができるのであれば、生徒の心情は更に変化しやすくなるのではないかと考えられる。最後の質問では、生徒はこれまで「書くこと」の活動を十分に行えていなかったことから、新鮮味が感じられ「感じられた」と回答した生徒が多かったのではないかと考えられる。しかし、14%の生徒は「感じられなかった」と回答していたことから、生徒一人ひとりに即した授業改善が求められる。

4. まとめと今後の展望

本実践研究では、英語科の4技能のうち「書くこと」の授業実践を通して、生徒の英語学習のモチベーションや自己有用感を向上させる取り組みを行った。その結果、「英語」自体について好きになったり、得意になったりは短期間の中ではしなかったが、多くの生徒が「書くこと」の授業実践を通して「少しでも楽しいと感じられた」と回答した。その中でも、生徒は授業実践を通して様々なことに気づいており、これからの学習に活かすヒントを得たと思われる。その点が、今回の実践研究の中で一番効果があったのではないかと考えられる。

今回の実践では授業の導入として10分～15分の帯活動実践として行った。中学校初期段階において、「書くこと」の導入や活動に多くの時間を使うことは現状簡単ではない。そのため、毎回の授業の導入で継続的に行っていくことで、生徒はライティングの技能はもちろん、英語を効果的に学習するヒントを得ることができるのではないだろうか。また、今回の授業実践において、14%の生徒が「少しも楽しいと感じなかった」と回答した。今後は、このように英語を学習することへどうしてもモチベーションを持つことが難しい生徒へのアプローチも再考していかなければいけない。また、学年や成長段階が上がるにつれ、「書くこと」の評価も工夫していかなければいけない。これから、以上の2点を重点的に考え、生徒一人ひとりに合った指導方法の実践や調査を行っていく予定である。